私の履歴書

前橋汀子

㉕

ミルシテイン

モントルーのシゲティ邸には、先生を慕って世界中から音楽家が訪ねてきた。お宅に出入りしていた私は、彼らを紹介してもらう機会に恵まれた。

バイオリンの巨匠ナタン・ミルシテインもその一人。私はミルシテインの大ファンで、彼のコンサートにたびたび足を運んでいた。

シゲティ先生が亡くなった後、私はミルシテインの指導を受けるようになった。彼はロンドンに住んでいたが、スイスが大のお気に入りで頻繁に訪れていた。飛行機は嫌いな人だから、ドーバー海峡を船で渡って夜行列車でスイスにやってくる。

彼はローザンヌの高級ホテルを定宿にしていた。到着するとモントルーにいる私に連絡をくださる。レッスンが終わった後は、彼自身の練習を聴かせてもらったり、食事をごちそうになったりした。

彼がニューヨークで公演した際にもレッスンを受けた。途中で電話が鳴り、彼はロシア語で口論を始めた。「今の電話はホロヴィッツだよ。今夜練習に来ることになっていたけど、具合が悪いから休ませてくれって」。ピアノの巨匠ホロヴィッツはミルシテインと同じウクライナ出身で同い年。2人は親友だ。

どんな状況でも柔軟に

指づかい 普段から何通りも

レコーディングの選曲でもめたらしい。「僕はブラームスのソナタを弾きたいのに、彼はそれでは売れない、グリーグのソナタがいいって言うんだよ」。そんな話を明かしてくれた。

ミルシテインから学んだのは、どんな状況にも即応して演奏できるフレキシビリティー。彼は演奏するホールの大きさや響き方、天候などの様々な要素を考え、それに応じて左手の指づかいや弓の動かし方を変えるのだ。普段から何通りもの指づかいで練習していた。

彼は70歳をすぎていたが、現役でステージに立ち、見事な演奏をしていた。だからその教えには説得力があった。

実はまだミルシテインに師事する前のこと、指揮者のズービン・メータから電話があった。「ソリストのミルシテインが体調を崩してイスラエルフィルの公演に出られなくなった。テイコ、君が代役をやってくれないか」。メータはイスラエルフィルの音楽顧問でもあった。

1972年夏、イスラエルのテルアビブに到着した私は空港で厳重なチェックを受けた。日本赤軍のテロ事件から日の浅い時期だったからだ。音楽会はテルアビブ、エルサレム、ハイファで開かれた。ミルシテインの代役で私がソリストを務めた。

テルアビブ公演の楽屋に思いがけない人が訪ねてきた。レニングラードの寮で同室だったライヤだ。「イスラエルフィルのポスターにテイコの名前を見つけてびっくりしたわ」。彼女はラトビア出身のユダヤ人。家族でイスラエルに移住してきたのだ。

「テイコ、これ覚えている？」。ライヤが取り出したのは、私が帰国するときにあげた七福神のお守りだった。着の身着のままソ連を出国してきて、税関でバイオリンまで取り上げられたというのに、そのお守りだけは大切に持っていてくれたのだ。

私はトランジスタラジオやドルなどをすべて彼女に渡した。「イスラエルフィルに入りたい」と言っていたが、ライヤの消息は不明。どうしているのだろう。

（バイオリニスト）

ミルシテインと

掲載日 2018年10月26日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。